九月の情景

法律学科3年　鈴木　星奈

広げきった　青と廃墟
屋上でヘッドフォン
芽吹かずに枯れた
花をずっと見ている

丁度ここから　よく見える
赤煉瓦町の　はずれから
近づいてくるのは　焦燥と
首つりの季節たち

何時からなのか　忘れたが
僕は静かに　狂いだした
焦げ付いた獅子が　嘲笑ってから
其れはさらに　ひどくなった

死にたくなる程　澄んだ空
雲だって君を　汚せやしないさ
飛べない僕に　価値などないよ
当たり前だ　なに言ってんだ

吐き捨てた　コンクリート
木目調の　リングは蒼白
感覚なんて　とうに捨てた
僕の指先が　やけに遠いよ
致死量の空気
肺に満たしたら
焼かれた喉で
いかれた唄を

唄え

唄え

唄え